



Japan Society of  
Youth and Adolescent Psychology

# News Letter

第 60 号 2013 年 1 月 25 日  
発行：日本青年心理学会事務局

## ■ 目次

---

### <第 20 回大会委員長挨拶>

佐方哲彦：日本青年心理学会第 20 回大会を無事終えて

### <特集>日本青年心理学会第 20 回大会特集号

井上知子：日本青年心理学会発足 20 周年を迎えて

高橋雄介：青年心理学会第 20 回大会に参加して

竹中一平：日本青年心理学会第 20 回大会に参加して

西中華子：青年心理学会第 20 回大会に参加して

### <書評>

平石賢二：スーザン・ヴォーゲル著，西島実里訳『変わりゆく日本の家族-〈ザ・プロフェッショナル・ハウスイフ〉から見た 50 年』

天谷祐子：梶田叡一・溝上慎一編『自己の心理学を学ぶ人のために』

### <広報>

事務局からのお知らせ

---

### <第 20 回大会委員長挨拶>

日本青年心理学会第 20 回大会を無事終えて

大会委員長 佐方哲彦（武庫川女子大学）

去る 11 月 10 日（土）・11 日（日）に第 20 回という記念すべき青年心理学会の年次大会を武庫川女子大学で開催させていただきました。参加者は会員外講師を含め 90 人ということで、節目の大会としてはやや盛況さを欠いてしまったことを残念に感じているところです。恒例の記念講演，研究セミナー，研究委員会シンポジウムのほかには，口頭発表 15 件，自主シンポジウム 2 件の大会プログラムとなりましたが，時間的余裕があり発表時間を予定よりも長くとれたことは発表者にとってよかったのではないかと考えています。

挨拶で書かせてもらったように，今大会は人間でいえば「二十歳になった」「成人式を迎えた」「大人になった」と形容できる記念すべき大会でした。名誉会員の秋葉英則先生の講演によれば，前身の懇話会から数えると創基 50 周年でもあり，ほんとうに大きな節目の大会だったことを改めて感じています。参集していただいた方々が，我が国の青年心理学の来し方を振り返り，青年心理学徒としてのアイデンティティを問い直し，これからの学会の未来展望を考えるきっかけとなる大会であったのなら，開催を引き受けた甲斐があったといえるでしょう。

今回は，被災地福島での開催となります。東北復興の一つの学術的なメルクマールともなる大会ですので，今回以上の参加者があることを祈念しています。

### ＜特集＞日本青年心理学会第 20 回大会特集号

日本青年心理学会は第 20 回大会を迎えました。特別講演をされた秋葉英則先生によると、前身である青年心理懇話会（のちに、青年心理学研究会）から数えると実に 50 回であるとのこと。これからますます発展すべく、会員一同、研究活動を盛り上げていきたいものですね。

今回も、大会に参加した方々から、参加しての感想などをいただきました。

（担当：中間玲子・長峰伸治）

### 日本青年心理学会発足 20 周年を迎えて

井上知子（追手門学院大学心理学部）

今年第 20 回の日本青年心理学会が開催された。記憶を紐解くと 1967 年に山梨大学での第 1 回の青年心理学研究会で自分の研究を発表して以来 45 年が経過したことになり感慨深い念にとらわれる。卒論で日米大学生の生き方の比較研究をした当時、指導教官の一人が神戸大学の津留先生に引き合わせてくださり性差心理学の 1 章を分担執筆させてもらった。他方もう一人の教官からは青年心理学は間もなく消滅するだろうから研究を変えた方がいいという助言を受けた。

現在の学会員数、青年期 10 年近い延長により解決すべき多くの問題が生起している現状からは隔世の感が強い。関西では津留先生を中心に秋葉先生が事務的の仕事をして始まった青年心理学研究会は現在まで継続している。依田先生には日本教育心理学会などお目にかかった。あまりにも遠い存在なので一方的に話されるのを聞いただけであるが、「青年心理学は当分学会ではなくて研究会として続ける方がいい」といわれていた言葉が印象的であったため、学会が発足してからも当分は会員になることに抵抗を感じていた。ある時学会の中で青年期のシンポジウムに参加したことから学会に加入したが、大きくその様態を変えている現代青年を対象に自分自身の研究をし、学生の修論、卒論の指導をする中で、西平先生が常に指摘されている研究課題の設定、研究方法はコレでいいのかという疑念を持ちつつ研究しているのが現状である。青年心理学会の益々の発展を祈念する。

---

---

### 日本青年心理学会第 20 回大会に参加して

高橋雄介（京都大学 高等教育研究開発推進センター）

この度は、非会員であるにも関わらず、貴学会の年次大会において、研究報告を行う機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。

今回の大会におきまして、私は、初日の午前中に、これまでに私自身が行って参りました縦断調査研究について、その調査デザインや縦断データに適していると考えられる統計手法についてお話をさせていただきました。

思春期・青年期は、人生において成熟に向かうための波乱の時期、嵐の時代と言われて久しく、身体的にも心理的にも不安定な様相を呈する時期かと思えます。しかしながら、それらが「どのように不安定なのか」「中にはそこまで不安定ではないグループも存

在するのではないか」といった発達や変化のダイナミクスに関する問いを立て、それらに対する答えを的確に導き出すためには、縦断調査とそれに適した統計解析が必要不可欠です。横断データには無い、縦断データだけに加味された「データの時系列性」というスパイスをうまく利用することによって、一步踏み込んだ解釈や考察を行うことが可能になるだろうと考えております。今回の拙報告が青年心理学会員の皆さまのご研究に微力ながらお役に立つことができましたら幸いです。

また、当日は、夕刻からの懇親会にもご招待をいただき、大変貴重な情報・意見交換の場となりました。この場を借りまして、深謝申し上げます。

---

---

### 日本青年心理学会第 20 回大会に参加して

竹中一平（武庫川女子大学）

この度、日本青年心理学会第 20 回大会に運営委員および発表者として参加させていただきました。一運営委員として、ご参加頂けました皆様にとって十分にご満足頂ける大会であったかどうかは自信がありませんが、本大会に多くの方々のご参加を頂けましたことを大変感謝しております。

さて、私の日本青年心理学会の大会へのイメージは、「発表時間が長い」という一言に尽きます。例えば、私がよく参加している日本社会心理学会の大会における口頭発表は、発表 12 分、質疑 3 分です。発表時間はともかく、3 分間の質疑時間は非常に短いと言わざるを得ません。一方で、日本青年心理学会の大会の場合、ロングセッションで 45 分間の時間が与えられます。30 分間発表をしたとしても、15 分間の議論が行えます。この時間があれば、頂いたコメントに対して自身の考えを説明し、更にその説明に対するコメントまで頂くことが出来ます。普段、論文でしかお名前を拝見したことの無いような先生と、しっかりと議論が出来るというのは、とても貴重な経験であると思います。

実際に発表をしてみて、抱いていたイメージ通りの密度の濃い発表時間を過ごすことが出来ました。座長の山田剛史先生をはじめとして、複数の先生方から様々な視点に基づくご指摘を頂き、自身の研究に対する理解を更に深めることが出来ました。私の発表に来て下さいました先生方に心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

---

---

### 日本青年心理学会第 20 回大会に参加して

西中華子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

この度日本青年心理学会第 20 回大会にて、「大学生における居場所欠乏感に関する研究」の題で、研究発表をさせていただきました。今年は残念ながら後半の 1 日しか参加できませんでしたが、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。今大会の企画や準備をしていただいた先生方に、心より感謝申し上げます。

青年心理学会は発表形式が口頭発表なので、小心者の私はとても緊張してしまいます。しかしいざ発表が始まると、会場全体が「若い研究者を育ててあげよう」というような温かい雰囲気や緊張など忘れてしまいます。会場に聞きに来てくださっている先生方とより身近につながる事ができる、それが青年心理学会の特長だな、と感じます。今回の発表でも座長の小澤先生をはじめ、たくさんの貴重なご意見を頂き、本当にありがとうございました。小澤先生から最後に頂いた、「一緒に居場所研究を盛り上げていきましょう」というお言葉を胸に、今後も研究を続けていこうと思います。

また研究委員会企画シンポジウムでは、「『青年』の定義再考」というテーマで、先生方の熱い議論をお聞かせ頂きました。青年心理学を研究していく上で多大なご示唆を賜りましたことを、心よりお礼申し上げます。

最後となりましたが、ニューズレター執筆の機会を与えて頂きました、ニューズレター編集委員の皆様、心より感謝申し上げます。

---

---

## <書評>

スーザン・ヴォーゲル著、西島実里訳

『変わりゆく日本の家族—クザ・プロフェッショナル・ハウスイフ>から見た 50 年』

(ミネルヴァ書房, 2012 年 7 月刊, 本体 3,990 円)

平石賢二 (名古屋大学)

本書は、クリニカル・ソーシャルワーカーである著者が 1958 年から開始し、その後 50 年以上もの年月をかけて継続した日本の家族に関する調査の結果に基づいて書かれたものである。調査対象は、当時のミドルクラスを代表する 3 人の「専業主婦」とその家族であり、主として日本人女性の心理社会的、文化的問題に焦点が当てられている。

極めてユニークで絶賛すべきなのはこの調査の方法である。当初はアジア研究の第一人者としても著名な社会学者の元夫エズラ・ヴォーゲルと共に開始したフィールド研究としての調査であった。しかし、その後も度重なる来日の機会の度に追跡してインタビューを繰り返し、主たる調査対象者である女性とその家族三世代の生涯を彼らの語りを通して、緻密に記録し続け、伝記的物語の事例研究としてまとめあげている点である。読者にまるで小説でも読んでいるかのような錯覚を覚えさせるほど、鮮やかに登場人物の体験や心理状態が描写されている。これは単なる研究者という立場ではなく、敬愛する友人として深く関わり続けた結果可能になったまさに究極の参加観察の所産であろう。

評者が最も深く感銘を受けたのは、戦後の日本人や家族の世代的变化である。親や祖父母の時代のことは、親から昔話として聞かされていたことも多い。あるいは様々な書物や論評を通して知っていたはずのことも多いが、本書に描かれた実在する事例は、共感を伴った世代的理解を促してくれる。また、読み進めながら、自らの歴史を振りかえっている自分に気づく。そして、自己理解には自分と家族の歴史を理解することが不可欠であるが、実は自分の知らない家族の歴史があまりにも多いことにも気づかされる。

最後に、本書では終章として現代の日本人に向けて、「不確かな時代を生き抜く力」とは何かを伝えている。そのメッセージは、生涯を通して日本人を深く愛してやまなかった一アメリカ人女性臨床家としての激励の言葉である。

是非、多くの方々、特に次代を担う若い世代の方々に推薦したい書である。

---

---

梶田叡一・溝上慎一 (編) 『自己の心理学を学ぶ人のために』

(世界思想社, 2012 年 2 月刊, 本体 2,415 円)

天谷祐子 (名古屋市立大学)

「自己」に関するテーマを扱う研究者は、自身のテーマをどの分野の問題としてアイデンティファイするのか、迷う時期があると思う。「自己」心理学という分野があるわけで

はなく、各分野に散逸しているからである。また自身の分野があっても、自分が身を置いている分野以外の「自己」研究へのアクセシビリティは低く、なかなか様子がわからない。

さらに、「自己」に関するテーマに興味のある初学者や、そのような初学者を指導する教員にとっても、この状況は悩ましい事態である。初学者は多くの分野の文献に当たらなければならない。指導する教員も「あっちの分野とこっちの分野、両方見ておきなさい」と無理難題に近いことを指導生に伝えねばならない。

そのような問題に解決への道筋を与えてくれる書籍が、「自己の心理学を学ぶ人のために」である。この書籍は、各分野に散らばっている自己研究に関して、社会・人格・認知・発達・青年・臨床心理学の各分野の中でどのような歴史的流れがあったのかという紹介がなされている。そして、各分野における近年のホットな研究者の理論が紹介されている。この1冊があれば、初学者はどの分野の研究が自分の「自己」に対する考え方に近いのかを知ることができる。指導する教員も「これを読んでみたら」と1冊紹介するだけで良い。そして各分野で現役で頑張っている「自己」研究者も、現在の他分野における自己研究がどのように展開されているのかを知ることができる。

この書籍の良い点は、他分野の論文単体を読むだけでは読み取ることが難しいような当該分野独自の視点や問題点、概括が、各章にて適切に説明されている点であろう。また、1冊を通して読むと、各分野における「自己」のとらえ方・切り口の相違を端的に知ることができる点も興味深い。初学者のみならず、自己研究者やそれ以外の心理学者にとっても学ぶところが大きい良書である。

---

---

## 《事務局からのお知らせ》

### I.2013年度大会について

次年度の大会（21回大会）につきましては、次号のニューズレターに1号通信を同封します。開催場所と日程等が決まっていますので、お知らせします。

開催場所：福島県福島市 コラッセ福島（産業振興複合施設）

大会委員長：五十嵐敦先生（福島大学）

日程：2013年11月16日（土）～17日（日）

問い合わせメールアドレス：career@educ.fukushima-u.ac.jp

### II.来年度からの常任理事と役割分担

昨年夏に行われた学会役員選挙の結果は前号でお知らせしましたが、昨年の大会前日に開かれた新理事会において、来年度からの理事長、ならびに常任理事と役割分担が決まりました。前号でお伝えした理事に加えて、理事長指名の理事1名が加わっています。以下、敬称略とさせていただきます、また理事長以外は五十音順にて表記しております。

理事長 後藤宗理（椋山女学園大学）

常任理事 大野 久（立教大学）：出版企画担当

佐藤有耕（筑波大学）：機関誌担当

白井利明（大阪教育大学）：研究担当

杉村和美（広島大学）：ニューズレター担当

高木秀明（横浜国立大学）：大会担当

溝上慎一（京都大学）：総務担当（事務局長を兼ねる）

若松養亮（滋賀大学）：事務局補佐・学会賞担当

任期は通常の理事と同じで、2013年4月1日から2016年3月31日までです。

### Ⅲ.学会賞の選考が2年に一度になります

これまで当学会の学会賞は「3年に一度（論文10本程度）を目途に行う」（日本青年心理学会学会賞選考規定の2）とされてきましたが、機関誌が2011年度より年2回発行となりましたので、次回の選考より「2年に一度」とすることになりました。これは昨年11月9日の理事会において、承認されました。したがって、次の選考は2013年度になりましたら、23巻1号～24巻2号の4冊に掲載された原著ならびに資料論文を対象に行われます。

### Ⅳ.会費の納入状況のお知らせについて

タックシールに付記して会費の納入状況をお知らせしています。この時期は、そろそろ次年度の会費を納めていただく季節ですので、みなさまに2013年度の納入も含めたご案内をしております。2012年度分より年会費の額が変更になっていますので、特にこれまでに未納の分がある方は、正確に計算をいただき、併せて納入していただきますよう、お願い申し上げます。納入状況の記号は以下の説明と照合してください（「払込取扱票」を同封していますが、そこにも同様の記載がございます）。なおこの記号は、1月20日時点のものをもとに作成しています。行き違いがございましたら、ご了承ください。

納入状況A：2013年度分のみ、納入してください。

納入状況B：2011年度までは完納。2012～13年度の2年分の納入が必要です。

納入状況C：2010年度までは完納。2011～13年度の3年分の納入が必要です。

納入状況D：（以下、未納の年数が1年分ずつ多いことを意味します）

入金振替口座は「00970-0-125990」です。なお来年度より事務局が移転しますので、この用紙は6月末までの使用にとどめてください。また「学生会員」と「一般会員」の区別に注意してください。大学院等に学籍がある方は、オーバードクターや研究生も含めて、「学生会員」となります（科目履修生は一般会員となります）。未納年が複数ある方で、途中からこの区分が移行した方は納入額にご注意ください。

★ ゆうちょ銀行以外の銀行からの振り込み先

店名：〇九九店 当座預金 口座番号：0125990

※この当座預金口座には、銀行のATMからも入金ができます。

※ゆうちょ銀行に口座を持っていて、「ゆうちょダイレクト」の登録◆をしていればインターネット経由で入金できます（「ゆうちょダイレクト」からの振替は月5回まで手数料無料なので手軽&お得です）。

◆[http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr\\_pc\\_wh\\_index.html](http://www.jp-bank.japanpost.jp/direct/pc/what/dr_pc_wh_index.html)

※会費を納めていませんと学会機関誌「青年心理学研究」は送付されません。2012年度までの会費を1月20日までに納入された方には今回、24巻2号を同封していますが、これ以後に納入された方への機関誌の送付は納入者が一定程度たまってからになりますので、2か月程度お待ちいただく可能性もございます。また、「青年心理学研究」への論文投稿と掲載も、当該年度までの年会費を納めていることが条件となります。

### Ⅴ.機関誌の廉価頒布期間がまもなく終了します

ニューズレター58号でお知らせしましたように、2013年2月末日までの期間限定で、19号までの機関誌のバックナンバーが200円、大会論文集は100円で購入していただけます。いずれも、2012年度までの年会費を納めた方に権利があります。学会ホームページのトップページにあります2012年3月31日付けのお知らせと、そこからたどれますPDFファイルをよくお読みになり、入手していない号がありましたら、この機会にお買い求めください。

### Ⅵ.会員異動

（個人情報保護のため、Web版には掲載しておりません）

日本青年心理学会事務局  
The Japan Society of Youth and Adolescent Psychology  
〒520-0862 滋賀県大津市平津 2 丁目 5 - 1  
滋賀大学教育学部 若松研究室内  
TEL & FAX : 077-537-7770  
E-mail : seinenshinri@edu.shiga-u.ac.jp  
Homepage : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsyap/>  
振替口座 : 00970-0-125990  
口座名称 : 日本青年心理学会  
お問合せはできるだけ E-mail でお願い致します。

追記) 学会事務局は、2013 年 4 月 1 日付けで、京都大学の溝上慎一先生のところに移転します。新しい連絡先やメールアドレス、振替口座番号などは学会ホームページ上でお知らせします。特に、4 月にご所属や連絡先が変わる方は、学会ホームページ「各種フォーム」のページにあります「登録情報の変更」の手順にしたがって、遺漏なく学会事務局宛てにご連絡ください。